
新説桃太郎伝説

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説桃太郎伝説

【Nコード】

N8395H

【作者名】

k a j i

【あらすじ】

2×××年の日本はテロの時代だった。7年前のワライダケガス散布テロにより笑い死による多数の死者が出た。その中で数少ない生き残りである桃太郎はパチンコ帰りにおじいさんに命を救われる。ワライダケガスによって親を失った桃太郎は復讐を決意する。7年経ちテロはますますひどくなっていた。大きくなった桃太郎は武装集団「鬼が島」を倒すべく立ち上がった。

むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんが住んでおりました。

おじいさんはパチ屋におばあさんは研究にいきました。

おじいさんがパチで大負けして帰る途中ある男の子を拾いました。

その男の子は母親と思われる女の人に抱えられて桃のバッチを握り締めていました。

家に帰っておばあさんと話し合ってその男の子には桃太郎とつけることにしました。

これはそんなお話です。

それから何年かして桃太郎は今野球のマウンドに立っていた。

「ストライク！ バッターアウト！」

相手バッターのバットが空を切り、ボールはキャッチャーのミットに納まった。桃太郎は華麗に腕を振り切りフィニッシュした。スタンドからは歓声がうるさいほどに聞こえ、桃太郎は自分のベンチに下がった。

夏の地方予選、桃太郎が所属する浦島学園は順調に勝ち進み、これに勝つと準決勝と決勝を残すのみとなった。スコアは4回が終わって5対0で勝っている。桃太郎は今までに1点も取られない快投を見せているのでこのまま完封で今回も終わりそうだった。

「桃の兄貴。さっきのストレート最高でしたよ！ この調子でいきやしょう」

この男は猿ヶ沢さるがさわ。通称猿。俺の女房役のキャッチャーだ。学年が俺より下でなぜか俺のことを兄貴と気が付いたら呼んでいた。俺は面倒くさいのは嫌いなのでそのままにしている。猿はキャッチャーの防具に覆われた巨体を揺らして今はバッターボックスに入っている選手を応援している。

「しかし、好調とは言えないのではないですか？ 私が見た限りでは好調時よりも球のキレが悪いと言わざるが負えない」

今度はショートいぬがみの犬上だ。通称犬。こいつは俺が前に食い逃げした時にたまたま同時に食い逃げをしていて、やつの足の速さに驚愕して思わずスカウトした。長身を思う存分に使ったスライドは確かに非常に絵になる。本人は足の速さだけは誰にも負けない自信があるらしい。基本的にあまり喋らないやつだが口を開くと嫌味しか言わないので俺はたまにスパイクに小石を入れてやろうと思うこともあるが大事なチームメイトなので我慢している。

「うるせえな。犬は黙ってるよ。0点に抑えてるんだから問題ねえだろうが」

「3回にスコアリングポジションで俺がヒット性の当たりをファインプレーで取ったのを忘れたとは言わせないぞ。あれが抜けてたら確実に得点が入っていたと思うがどうだ」

「なんだと！ だったら2回に調子に乗ってファーストに大暴投したのはどこのどいつだ。真正面の当たりのくせに大げさにスライディングキャッチやがってよ」

「まあまあ。兄貴に犬さんも仲良くやりましょうよ」

俺と犬はにらみ合った。それを宥めるように猿が間に入った。俺と犬は試合など関係なくいつもなぜかこんな感じになってしまう。そこにとことこ小さな体を揺らしてマネージャーきじしまの雉子島が近寄っ

てきた。

「桃太郎君。今日は4回までで投球数が69球、内ストレートが32球、カーブが19球、フォークが10球、シフトが8球、ちょっと球数と変化球が多いですね。桃太郎君は変化球が多い時は調子があまりよくない時だと思いますがどうでしょうか？」

「あ。ああ。ちょっと今日はストレートのコントロールがうまく行かなくてな。よく分かるな。雉」

「マネージャーとして当然のことですよ。それと記録するのが私の生きがいですから。まだ後5回ありますからガンバッテ投げてくださいね」

雉子島、通称雉は野球帽を被りなおすと誇らしげにスコアブックを掲げてニツコリと笑って自分の定位置の監督の横の席に戻っていた。彼女はなんでも記録するのが好きで将来の夢はスコアラーか野鳥の会でぼちぼちするのが夢だという変わった女の子だ。しかし彼女の分析能力は的確で試合中はよく監督にアドバイスを求められているようだった。実は監督の采配の殆どは雉のアドバイスがかなり大半を占めているらしい。

4回裏の俺たちの攻撃は三者凡退に終わって俺は殆ど休めないまま再びマウンドに向かった。1人目を三振にして2人目を2ストライクに追い込んだところで俺はキャッチャーの猿にあるサインを出した。

『次あれ投げるぞ』

『了解です』

猿が無言で頷き、俺は覚悟を決めた。この大会に入る前に山籠り修行で身に着けた新しい球種があった。その名も「トルネードボール」

この球種は竜巻のようにうねりながら回転し空間を切り裂くボールだ。俺は山籠り修行のときに熊をコークスクリーンブローで倒したときに突然投げられるようになった。ただこのボールはキャッチャーがキャッチできないという禁断のボールだ。猿もかなりのキャッチング技術を持っているキャッチャーだが猿を持ってもこのボールだけはキャッチできなかった。俺は猿にこのボールを投げるときはキャッチに行かなくていいから体で止めて後ろには絶対逸らすなと命令していた。

今はランナーがいないので気兼ねなく投げられる。絶好のチャンスだ。猿は幾分緊張した面持ちで大きく構えた。俺にとってもこのボールは禁断のボールで腕を特殊にひねるので手首、肘、肩などに異常に負担がかかるのだ。投げられて1日2球が限界だった。覚悟を決めてセツトに入り投げようかと思つた所で女の人の甲高い悲鳴が聞こえた。

「きゃああああ！ ガスよ。ワライダケガスだわ」

よく通る声だったのでマウンドにいる俺にもはっきりと聞き取れた。スタンドはざわめいていた。見ると黄色い一塁側のスタンドから黄色い靄のようなものが見えた。思わず主審がストップを掛けた。

「ただいまワライダケガスが発生しております。お客様は係員の指示に従つて落ち着いて非難してください。繰り返しです。ただいまワライダケガスが……」

球場に避難を勧告する放送が流れ球場全体がざわめいていた。俺も避難しなければならぬのだが俺にはある記憶が浮かびあがった。

『またワライダケガスか……俺はまたあれに苦しまなければならぬのか』

俺はそのままマウンドに蹲りそのまま意識を失った。

夢を見ていた。

小さい頃の俺だ。

俺は父さんと母さんに手を引かれて買い物に来ていた。

突然黄色い靄が出てきたかと前を歩いていたおじさんが急に笑い出して倒れた。

父さんは僕にマスクを掛けて僕を抱えて母さんと走り出した。

途中母さんが狂ったように笑い出した。

父さんの顔が苦渋に染まった。

そのまま僕を抱えて走り出す父さん。

必死で母さんと叫ぶ僕。

視界が真っ白になり夢の終わりを感じた。

意識を取り戻すと俺は控え室のベンチに寝かされていた。周りには他のメンバーが沈痛の面持ちで俯いていた。俺は近くにいた猿に状況を聞いて見ることにした。

「おい。猿どうなったんだ？ 教えてくれ？」

俺が起きたことに気づいていなかった猿は一瞬驚いたがすぐに苦渋の表情に戻った。

「とりあえず待機になったんですけどたぶん6回まで行ってないから……」

そこまで猿が言った所で控え室のドアが開いて監督が入ってきた。他のチームメイトは監督に駆け寄ってどうなったんですかと詰め寄った。俺も思わずその場に立ち上がった。監督はみんなを見回して言った。

『今日の試合はノーゲームだ』

それから再試合は事が事なので未定だということだ。あのガスは俺から親だけでなく野球まで奪い取ろうと言うのか。いやそんなことはない。まだ負けた訳ではない。何が邪魔しようとも俺は勝って見せる。俺は立ち上がってチームメイトに言ってやった。

「お前ら！ よく聞け。俺は何度ノーゲームになろうと最後まで投げきってやる！ 俺たちは負けない。なあそうだろ！」

猿を始めチームメイトはぽかんとしていたが一転爆発的な盛り上がりを見せた。

「兄貴いー！ それでこそ兄貴っす。兄貴最高おー！」

「桃太郎！ 桃太郎！ 桃太郎！」

「桃太郎君。素敵です。この動画はDVDに焼いて学園中に配布することになります。この感動は皆さんで共有しないと。良かった携帯を買い換えておいて」

桃太郎コールが舞い起こり、俺は胴上げされた。雉が携帯で動画撮影をしているのが気になったが俺たちのチームは今1つになった。俺は胴上げされながら球場を後にした。

数日後、一向に再試合が始まる気配がなかった。先の見えない日々には俺はかなりイライラしていた。その夜の自分の部屋でテレビを見ているとちょうどワイドケガスについての特集をしていた。

『2×××年の 月 日にワイドケ散布によって始まったテロ集団「鬼が島」の猛威は今も留まることをしりません。「鬼が島」首領通称鬼は全ての政治家の自宅にワイドケガスを送り粛清する。我々の国家は一度浄化しなければならぬとの声明文を出しており今月1ヶ月を見ても……』

俺はテレビを見ながらぼんやりと考えていた。俺はあんまり覚えていないがこのワイドケ散布事件に巻き込まれて今お世話になっている爺さんに拾われた。他に身寄りがなかった俺はそのまま爺さんの養子になった。爺さんに拾われなかったら俺はどうなっていたんだか。

「感謝しても感謝しきれねえな……」

思わずそう呟いていると階段をえらい勢いで駆け上がってくる音がした。俺は反射的にドアに鍵を掛けた。

ガッ

ガッガッガッ

ガガガガガガ

恐らく爺さんだと思うがえらい勢いでドアのノブを連打してきた。

「爺さん！ 止めろ！ ドアが壊れる。今月何枚ドア壊したと思ってるんだ」

「……」

急に静寂が支配したかと思うと今度は体当たりするような鈍い音がした。

ドン

ドンドンドン

ドンドンドンドン

「わしを舐めるなー！ ドアの分際でえええ！」

このままではドアをぶち破られると判断した俺はドアの鍵を開けた。そうすると爺さんが俺に飛び込んできて爺さんの18番空中とび膝蹴りが俺に突き刺さった。

しばらくおまちください。

「おい！ おい！ 桃太郎大丈夫か」

目を覚ますと爺さんに揺すられていた。俺の怒りは沸点に達し、俺は爺さんに腕肘十字固を決めてやった。

「お。おい。桃太郎それはしゃれにならんぞ。うつ。三途の川が見える……桃太郎。止めてくれ」

「爺さん一回三途の川を社会科見学するのもいいんじゃないか。おらおら。どうだ！」

俺はより一層力を入れて締め上げた。108の格闘技を制覇したと自負している爺さんならこれくらいはなんとでもないはずだ。

「ぐ。抜けられん。そんな馬鹿な。く。これはだめだ。お。おい桃太郎テレビだ。テレビ。大変だぞ！」

「そんなことで騙されるかあー！ アームロックを食らえ！」

「ごふ。ごふ。ほ……本当じゃ。テレビを見てみい。KOUYARENの会長が出てるぞ」

「なんだって」

爺さんのアームロックを外してテレビを見るとKOUYARENの会長まぐわいあが出ていた。

『コノ度大變不本意デスガ、生徒タチの安全ヲ考慮シマシテ、大会ノ中止ヲ決断スルコトニイタシマシタ……』

どうやらまぐわいあ会長の話によると頻発するテロで大会中に死亡する人が増えてきているので大会を中止することだ。

「ふざけるなよ。俺がどんな思い出ここまでやってきたと思っているんだ！」

俺は怒りで猿に電話を掛けた。

「ちゃーす。兄貴！ どうしたんすかー」

「猿！ 部員全員に召集を掛ける。今から俺の家で作戦会議を開く」

「あ。兄貴。作戦会議ってな」

俺は用件を言い終わるとすぐさまに電話を切った。足元では爺さん

が苦しんでいた。どうやら思わず踏んでしまっていたらしい。

10分後に猿が最初に来て、20分ほどで犬と雉が集まった。中々優秀だ。

「猿。これで全員なのか？」

「兄貴すんません。時間が時間なんでこれしか集められなかったす」

「そうか。まあ仕方がないな」

改めて3人を見回すと犬は無言で腕組みをして座っていて、雉は力メラを持って伸びている爺さんを撮影していた。

「へー。これが桃太郎君のお部屋なんですね。それでこれが桃太郎君のお爺さんなんですね。コンニチハー。私マネージャーの雉子島と申しますー」

「雉。あの……な。何撮ってるんだ？」

「ふえ。やだなあ。桃太郎君。私の仕事は記録することだって何回も言ってるでしょ。気にしないで。どぞ。どぞ」

そう言いながら撮影を続ける雉。お前が呼んだのかと視線で猿に確認すると、猿は必死に頭を振り否定した。どうやらどこからか情報を仕入れて勝手に来たようだ。まあ気にしないで本題に入ることにした。

「まあたぶん知ってるだろうが今日のニュースで大会の中止が発表された。このままでいいと思うか？ お前たちは甲子園には行きたくないか？」

「行きたいがどうしようもないだろうがKOUYARENが決定したことなんだ。それはお前にもわかっているだろう。お前はそま

で馬鹿ではないと思っていたがな。」

犬は今まで黙っていたかと思ったたら急に話に入ってきて、毒舌を吐き出した。俺はここで怒ったら話し合いにならないので我慢して話を続けることにした。

「まあそれで俺から一つ提案が」

「おお。お前ら夜中にご苦労さんだな。夜食にカレーはどうだ。カレー好きだろ？」

急に婆さんがカレーを持って部屋に入ってきた。婆さんは科学者で元はワライダケガスを作ったワライダケ博士の助手をしていたこともあるという経歴を持っている。家の中でも外でも白衣を着ていてかなり目立つ。しかも70を超えているとは思えない美貌の持ち主で町を歩いているとよくスカウトされるらしい。

「悪いな。そこに置いてくれ」

「いっぱいあるからな。たくさん食べるんだぞ。じゃあな。爺さんはもらっていくからな」

婆さんはカレーを置くと爺さんを引きずって部屋から出て行った。あまりの出来事にさすがのこのメンバーもぽかんとしている。

「も。桃太郎君。あの人はお姉さんでしょうか？」

「俺の婆さんだ。悪いが質問は受け付けないぞ。時間がもったいない」

「婆さん！（3人一同）」

「桃。あれが婆さんなのか。特殊な薬でも使っているのか。いや。そうか分かった。婆亜三という名前なのか。そうか。それなら納得だ」

「おい。犬。気持ちは分かるがあれは70を超えた俺の祖母だ。グランドマザーだ。後話が進まないからこれで打ち切るからな」

俺はもつと聞きたいような顔をしている3人を無視して話を先に進めることにした。

「それでだな。一つ提案があるんだ。そもそもの
「カレーピラフもあるがどうだ」

婆さんが急に部屋に入ってきたかと思うと今度はカレーピラフを持ってきた。俺は話の腰を折られたので少タイラツと来ていた。

「ああ。悪い。そこに置いてくれ」

「それでだ」

「桃太郎。カレーうどんはどうだ」

「あ。ああ。そこに置いてくれ」

「それでだな。俺はそもそもの根本的なことを解決すればいいと思うんだ。それは」

「食後にカレーアイスはどうか？ 冷たくてうまいぞ」

「ばばあ！ 出てけ。邪魔だ！」

俺は婆さんを追い出して部屋に鍵を掛けた。しばらくドアを叩いていたが俺は無視を決め込むことにした。

「悪い……。取り乱したな。まあ簡潔に言っと俺たちでテロ集団「鬼が島」をやっつけてしまえばいいんじゃないかと思っているんだ。そうすれば大会も再開されるに違いない」

「兄貴。気持ちは分かるんすがちよつとそれは無理じゃないっすか」

俺は普段はあまり表には出していなかったが親を殺したテロ集団が

今ものうのうと活動しているのは我慢できなかった。

「お前たちがやらんと言っても俺はやることに決めたからな。俺は一人でも「鬼が島」を倒す！」

「……」

犬、猿、雉共々無言で黙っていた。どうやら俺一人でやることになりそうだなと思っていたら犬が話し出した。

「桃。本気なんだな……」

「ああ。俺はいつでも本気だ。それはお前もよく知ってるだろ？」

俺と犬は数秒視線を交し合った。それで犬は俺の本気をどうやら納得したようだった。

「こいつが一度やると言ったら曲げないからな。よし。俺たちも協力するぞ！」

「分かりました。俺も及ばずながら兄貴のお手伝いします」

「私も撮影頑張りますね！」

「兄貴いい！ 景気付けに桃太郎コール行きます！ 桃太郎！ 桃太郎！ さあ。一緒に！」

「桃太郎！ はい！ 桃太郎！ はい！ 桃太郎！」

俺たちは拳を高らかに掲げ桃太郎コールを続けた。俺は犬、猿、雉に出会えたことを心から感謝した。俺にはこんなに頼りになる仲間がいるんだ。

「桃太郎！ 桃太郎！ って爺！ どこから入ってきやがった！」

「桃太郎お！ 桃太郎お！ わしには不可能はないのじゃ！ ほれ声量が足らんぞ！」

「この糞爺がどこかに行きやがれ！」

俺は爺さんを担ぐと部屋の入り口のドアに投げつけた。そこに運悪く婆さんが井を持って現れた。

「桃太郎。カレーラーメンっていうのもあるんだ。じ。爺さん。や。やめ。ぎゃあああ」

ドン

ガッシャン

ゴロゴロ

俺が投げた爺さんは婆さんを巻き込んで部屋から飛び出て階段から転げ落ちた。

「お爺さん！ お婆さん！ 大丈夫っすか！ ああ。麺が飛び散ってる。兄貴。大変なことになってるっす。来てくださいよ」

「惜しい人を亡くしたな。なんまいだぶ」

「桃。お前鬼だな……」

「すごい！ すごい！ 今日来て良かった。こんなに決定的な瞬間をカメラに収められるなんて。ああ。帰ったらリピート再生しないと！」

やけにテンションがあがった雉はさておいてとにかく俺たちはテロ集団「鬼が島」を倒すことになった。俺は必ず「鬼が島」を倒し親の敵そして大会の再開させると拳を硬く握り締めて決意した。

「爺！ お前覚悟できてるんだろうな」

「婆さん。その右手に持っているものは何じゃ！」

「うるさい！ 食らえ！」

「ぐああああ。溶けるうつつ」

階下では爺さんと婆さんのバトルが繰り広げられていた。

俺たちは次の日から「鬼が島」のアジトを探すために奔走した。ネットで情報を集めて事件現場に行つて話を聞いたりしたが思ったほどに成果は上がらなかった。

ある日俺が夜遅くまで聞き込みに奔走して家に帰ってくると爺さんと婆さんが居間に座つて俺のことを待っていた。

「桃太郎。遅かったな。話があるからそこに座れ」

「どうした爺さん。詐欺にでもあつたのか」

「いいから座らんか！」

いつもと違う爺さんの雰囲気には俺は思わず圧倒されてしまった。いったいどうしたというのだろうか。

「お前「鬼が島」のアジトを探しているらしいな」

「爺さん。なんでそれを知っているんだ」

「まあ。黙って聞け、前にお前にも話したと思うんじゃないが婆さんがワライダケ博士の助手をしていたという話は聞いたな？」

「ああ。それがどうした？」

なぜ急にそんな話になるのか分からなかったが爺さんは婆さんと視線を交わして合図したように見えた。

「実はそのワライダケ博士は婆さんの実の兄なんじゃよ」

「なんだって！？」

「かつて婆さんとワライダケ博士ともう一人とで研究の末ワライダケガスを開発した。しかし、ワライダケ博士はそのガスの強力性に

これを世に出すのを止めようと決意した。共同開発者の3人はそれで納得していたのだが、ワライダケガス散布事件のあの日婆さんが外出しているときにもう一人がワライダケ博士を殺害してワライダケガスを持ち去ったんだ。研究所に戻った婆さんはワライダケガスが持ち去られたことに気づいて、当時恋人だったわしに持ち去ったワライダケガスの行方を捜してくれとの話が舞い込んだ。わしは周辺を探し回ったが中々見つからなかった。もしかしたらと思い当時人が一番集まりそうだった最近できたデパートに向かったがもう手遅れだった。幸運だったのは桃太郎お前だけはなんとか助けることができたことだ。今でもはつきり覚えておるよ。お前を抱えたお前の親父さんがわしに息子を頼むと懇願してきた姿をな。それからはお前も知ってる通りじゃ。その共同研究者はそれから「鬼が島」というテロ組織を結成して今日までテロ行為意を続けておる。わしらは可能な限り手を尽くしてやつらの行方を探し回っていた。そしてついにやつらのアジトを見つけることができた」

そう言つて爺さんは一枚の紙切れを俺に渡した。その紙を手にとって開くとそこには近くにあるファミレスの地図が載つてあった。

「爺さん。これは……」

「どうやら「鬼が島」は普段はファミレスを経営しているようじゃ。そこでの利益が活動費になっているらしいのじゃ。これほど近くに本拠地があつたとは盲点じゃったわ」

そう言つて爺さんは悔しそうに歯を食いしばった。そこで爺さんの入れ歯が外れ、悲しげに床に転がった。一瞬辺りに静寂が支配したが俺は笑いを堪えて爺さんに向き合った。

「爺さん……。任せておけ！ 必ず「鬼が島」は討伐してみせる」

俺は爺さんに向けてガッツポーズをしてみせた。爺さんは入れ歯を

拾いながら小さく行つて来いと呟いた。俺が家から出ようとしたところで婆さんに呼び止められた。

「桃太郎。これを持っていけ。私の今までの研究成果だ」

婆さんに渡された袋を見ると中は黍団子だった。婆さんの話によるとこれを食べるによりワライダケガスに対する耐性ができるということらしい。俺にとってこれは大きな武器だ。

「婆さん！　ありがとう。俺、絶対勝つて見せるからな」

俺は婆さんに礼を言つて家から出た。時刻は深夜の1時を回っていたが俺は主要なメンバーに電話を掛け集合させた。20分程で犬、猿、雉が集まった。俺はみんなを見回してこう言った。

「これよりファミレス「鬼が島」に鬼退治に行く」

「桃。ファミレスに鬼退治に行くだと？　どういうことだ？」

俺はみんなに今までの経緯を説明した。それを聞いてみんなはなぜファミレスなんてやってるんだという疑問が浮かんだようだったがそれは俺も疑問の点だった。しかし、テロ集団「鬼が島」がファミレスをやっているという事実是不変。敵の居場所が分かれば俺たちができることは敵を叩くことだけだ。

「今なら降りてもいいんだぞ。誰も責めはしない。俺は一人でも「鬼が島」を叩く！」

「兄貴。俺は兄貴に付いていくだけっすよ」

「俺の心はあの食い逃げのころから決まっているさ。お前がやるっていうなら俺は付いて行くだけだ」

「ああ……。また好い絵が撮れそう。楽しみ　ダメって言っても

付いて行きますからね」

すでに俺たちの心は一つだった。俺たちは決戦の地「鬼が島」に向かい歩き出した。

家から歩いて十分程でファミレス「鬼が島」に着いた。外観はどこにでもあるようなファミレスでまさかここが世界を騒がしている「鬼が島」の本拠地だとはとても思えない。深夜ということもあり店の中にはあまりお客さんがいないようだった。俺も何度か来たことがあるがこのファミレスは基本洋食がメインのメニューでシェフの気まぐれランチが498円で食べられるということでお昼時は家族連れやサラリーマンで混雑している。今は期間限定でフルーツパフェが200円引きで食べるらしい。

「ここか。まさか戦うためにファミレスに来るとは思わなかったな」
「本当にここ何すか？ ただのファミレスにしか見えないっす」

「爺さんの情報を疑う訳では無いが、まあ俺が確認して見る。それで判断しよう。それよりも犬。黍団子一つ私にくださいなと言え」
「何だつて……」

ファミレスに乗り込む前にワライダケガス対策として婆さん特製の黍団子を食べなければいけないのだが儀式の一つとしてこのフレーズは必要な気がした。犬は明らかに嫌がっていた。

「早くしろ！ その台詞を言わないと先に進まん。もちろんリズムに乗ってだぞ」

「……」
「犬よ。俺のやることに付いて行くと云ったはずだがそれは嘘なのか？」

「いや。嘘ではないがしかしだな……」

冷静な犬に明らかな困惑の色が見えた。見ると顔に異常な量の汗を掻いている。それほどこれを言うのが嫌なのか。

「犬よ。これを言うことによつてだな。人類が救われるんだ。その延長線で全国の球児がまた野球ができる。ここが男の見せ所だぞ！犬上！ 食い逃げをしていた時のお前はそんな男じゃなかったじゃないか」

「ぐぐぐ……。こんな屈辱初めてだ」

犬はかなり悩んでいたがやがて決意して台詞を言い出した。

「一つ……私にくださいな」

「はい」。よくできましたあ。では配りますねえ。猿君」

「おい！ ちょっと待て」

俺が犬の台詞を聞いて満足して他の連中にも黍団子を配っていた所で犬が叫んだ。どうやら他の連中もさっきの台詞を言わなかったのが気に入らなかつたらしい。

「おい！ なぜ俺だけなんだ」

「それよりも早くしろ。潜入するぞ。何をもたもたしている」

「うぐぐぐ……」

犬は悔しそうに黍団子にむしゃばりついた。他の仲間も黍団子を食べ終わり、俺たちはワライダゲガスに対する耐性がついた。俺たちはひとまず一般客を装って侵入を試みることにした。

「いらつしゃいませ。何名様でしょうか？」

店に入ると可愛いウエイтрレスが俺たちを出迎えてくれた。

店の中を見回すとどうやらお客は俺たちだけのようだった。俺たちは奥の席に陣取り、メニューを決める振りをしながら作戦を練った。

「俺に考えがある。任せろ」

俺はテーブルにあるボタンを押してウエイтрレスを呼んだ。先ほどのウエイтрレスがこちらの席まで来た。俺は何気ない素振りでメニューに目を落しつつ、ウエイтрレスに注文を告げた。

「ドリンクバーときのこのシチュー……ワライダケ抜きで……」

「!? あなた……何者ですか？」

「聞こえなかったのか。きのこのシチューワライダケ抜きだ」

ウエイтрレスはその場で固まってどう動くか迷っていたようだったが異変に気づいた一人の男の店員がこちらに近づいてきた。その男の店員に俺は見覚えがあった。刺すような視線にやたらと整った顔立ち、俺の親友の鬼門^{きもん}だった。

「君。どうした？」

「このお客様がワライダケ……」

小声で説明をするウエイтрレス、俺はその行為に苛立って思わず声を掛けた。

「おい！ 久しぶりだな。鬼門」

「え……。お前は桃太郎か。なぜここに」

初めは俺のことが分からなかったようだがすぐに俺のことを思い出したようだ。鬼門、こいつは俺の親友であり、ライバルだ。かつて

は試合で投げ合ったこともある。次に会うときは甲子園だと約束していたのだがこんな形で再会するとは思わなかった。

「お前との再会は甲子園だと思っていたがまさかお前が「鬼が島」の一員だとは思わなかったぞ」

「ぬくぬくと野球だけやっていればいいお前に何が分かる！ はい！ ありがとうございますましたあー。おい。早くテーブルを片付けろ。俺は父さんの理想を実現しなければならんだ」

そう言つてテーブルを拭き始める鬼門。鬼門の話しぶりからするとどうやら鬼門の親父が「鬼が島」のリーダーか何かのようだ。それならこいつがテロの片棒を担いでいるのも合点が行く。

「しかし、知られたからには生かしては置けんな。やれ。お前ら！ 八つ裂きにしろ！」

いつの間にか周りには屈強の白衣を着た男の集団が立っていて俺たちに向かって襲い掛かってきた。手には包丁やらお玉やらを持っている。装備から察するに厨房係のようだ。

「犬！ 猿！ 雉！ 鬼狩りだ。行くぞ！」
「了解！」

犬はスピードを活かしたスライディングキックで相手の足の肉をそぎ落とし、猿は持参した金属バットで応戦、なぜか猿は積極的に店を破壊していた。どうやら猿の押しではならないスイッチが入ったようだ。雉はカメラフラッシュで威嚇しているように見えた。俺はこの左腕で応戦する。

「まさかこのボールを試合以外で投げるとは思わなかった。行くぞ

！ トルネードボール！」

俺はボールを握り締め、思い切り振りかぶって敵に向かってトルネードボールを投げつけた。ボールは店のテーブルや椅子を切り裂きながら敵を巻き込んで店の壁を突き抜けた。あつという間に敵は殆ど地面に倒れていた。

「く。このままでは父さんの理想が実現できない」

「お前の親父の言う日本改革戦線など実現されてたまるか。おとなしく観念するんだな」

鬼門は顔を苦渋に染めていたがやがて狂ったように笑い出したかと思つとファイティングポーズを取った。

「俺は観念などしない！ 俺ができることは父さんの理想に追従することだけだ。お前ら立て！ あいつらは我々の理想の障害となるものだ。必ず排除しなければならない。行くぞ」

そう言つて再び襲い掛かつてくる鬼門率いる「鬼が島」。俺はトルネードボールを連発して敵と店を吹き飛ばした。トルネードボールを3発はなつた時には相手は一人も地面に足を付いて立つてはいなかった。そこにやたらと上機嫌な一人の親父が店に出てきた。

「ふんふんふーん。おい！ お前ら勝ったぞ。今日の戦利品は板チョコだ。つてうお！ なんだこれは！ 俺の店がああ！」

その親父は持っていた袋を投げ捨てると今やただの木材と成り下がったおそらくテーブルの一部である木を拾い上げてぶるぶると震えていた。

「父さん……ごめん。俺。父さんの理想を守れなかった……よ」

鬼門は息も絶え絶えにその親父に向けて語りかけた。親父は鬼門を冷たい目で見つめたかと思うと奥の方に引っ込んだ。しばらくして出てきたかと思うと親父はガスマスクを装着し、背中にはボンベのようなものを背負っていた。まずいと思ったが遅かった。親父は背負ったボンベからガスを放出した。ワライダケガスだ。黄色いガスが俺たちに襲い掛かった。

「はははははー。これでお前たちも終わりだあー。息子よ。すまん。俺はここで倒れる訳には行かんのだな。ではさらばだ！」

「そうはいくか！ 猿。タッグ攻撃だ！」
「がつてん！」

俺たちは何とか黍団子のお陰でワライダケガスの魔の手から逃れることができた。俺は再び振りかぶり猿に向けてトルネードボールを放った。そのボールを猿は親父に向けて打ち返した。親父は背負ったボンベごとみに散った。

「はははは。これまでか。まさか。はははは。自分自身が。ははは。ガスに。はははあは。かかるとな。ははは。ジュニア逃げる！ お前だけでも俺の理想を実現してくれ！ はははははははははは」

親父はもう笑いが止まらないようだった。他の倒れていた従業員も笑い転げて店内は笑いで満ちていた。鬼門も笑い転げていたが目は笑っておらず、俺を憎憎しげに睨んでいた。

「許さんぞ！ 桃太郎おお。はっははははは。ぐ。僕もか。ははははあは。これまでか」

「鬼門」

「もう手遅れです。行きましょう」

猿に引つ張られてファミレスを後にした。俺たちが脱出するとなぜかファミレスは爆発した。これでテロ集団「鬼が島」は全滅した。おそらくワライダケガスもなくなっただろう。テロも無くなった。しかし親の敵は取ったが俺はまた一つなにかを失った気がした。数日後、大会も再開することになり、俺たちは勝利を勝ち取り甲子園の切符を手に入れた。

甲子園の初戦の相手投手が鬼門。俺はまさかと思ったが投球練習をしているあのフォームはまさしく俺の記憶の中にある鬼門のものであった。あいつは生きていたのだ。俺たちの戦いは第2ラウンドに突入するみたいだ。望む所だ。俺は何度でもこの左手がある限り投げきって勝ってみせる。

鬼門は投球練習を終えると右手を俺に向けて高々と掲げた。それは俺たちだけが分かる合図で宣戦布告を意味していた。俺は左手を鬼門に向けて掲げて応えてやった。鬼門は満足げに微笑むとベンチに戻って行った。

俺はマウンドに上がり、再び野球ができる幸せを噛み締めていた。どうかこれからも世界が平和でありますように。

「行くぞ！ 猿！ 全国制覇だ」

俺は猿に向けて渾身のボールを投げた。

「ストライク！」

俺たちの本当の戦いはこれからだ。

（後書き）

ご拝読ありがとうございます。

私としては一ヶ月ぶりの短編です。野球の描写を書いてみたかったのでよかったです。一応原作は「桃太郎」なんですが改変しすぎて相変わらず訳分からなかった話になりましたが自分らしさは出せたと思いますので良かったと思います。

読んでいただけた方ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8395h/>

新説桃太郎伝説

2010年10月12日05時14分発行